

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展 5 畠田和一が採集していた岡山県の絶滅危惧種 1」

2021 年 10 月 9 日（土）～2022 年 3 月 27 日（日）

岡山県版レッドデータブック 2020 で絶滅危惧 I 類とされた，内湾や河口汽水域の潮間帯の種

展示する種（14 種）：ヘナタリ，モロハタマキビ，ミズゴマツボ，ハツカネズミ，ウネムシロ，イタボガキ，イセシラガイ，イチョウシラトリ，オチバ，ムラサキガイ，イソシジミ，フルイガイ，ヤチヨノハナガイ，クチベニ。

これらの種の岡山県での減少要因は，1959 年の児島湾閉め切り淡水化に代表される内湾環境の悪化である。干拓・埋立による干潟の消失や，護岸による海岸・河岸の単純化，水質汚染などが大きな打撃となり，個体群数・個体数ともに著しく減少した。これは児島湾だけでなく，高梁川河口や笠岡湾などでも同様である。

また今回提示する種の一部は，県内で過去 50 年間生貝が見出されておらず，既に絶滅した可能性も否定できないものの，比較的新鮮な死殻が得られているか，棲息していても不思議はない環境がわずかに残されているという理由で，絶滅と断定せず，絶滅危惧 I 類に含めたものである。

これらの種の多くは，畠田和一自身が 1935 年に公表した岡山県内の貝類方言の報告，あるいは桂又三郎が 1932 に刊行した岡山貝類方言図譜に掲載されている。それらの種に対する方言名が存在したということは，当時の地元の人が明確に認識するほど多産していたか，日常生活に関係が深かったことの証拠である。また一部の種は，岡山県のみならず他県でも，普通に産すると見なされていたことが戦前の文献から読み取れる。

（岡山大学 福田宏）

ヘナタリ

Pirenella nipponica Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：オニノツノガイ形亜区：オニノツノガイ上科：キバウミ
ニナ科)

展示標本： #260 備中〔倉敷市〕連島

内湾奥の汽水域において、砂泥干潟中・下部の表層を匍匐（ほふく）し、カワアイとともに産出することが多い。ただしカワアイが軟泥干潟下部にも棲息可能であるのに対し、本種はより岸辺寄りで底質がやや粗い場所に限られる。奥谷・波部 (1975) が『学研中高生図鑑』で「干潟にばらまいたようにいる」と表現した通り、本来は高密度で多産する種であり、三河湾以西の西南日本には今も同様の光景を示す場所が少なくないが、関東～中部地方沿岸では湾奥の開発と水質・底質汚染のため減少傾向がはなはだしく、東京湾ではかつて知られていた産地の大半が消失し、相模湾では絶滅した。

瀬戸内海では西部の周防灘には現在も健在であるのと対照的に、中央部ではもはや絶滅秒読み段階と呼ぶべき惨状である。瀬尾・Tanangonan (2014) は 2009～2011 年の香川県における調査の結果、「著しく磨滅した死殻が、限られた地点でごく少数採集されたのみであった」と報告した。岡山県でもほぼ同様に、近年本種の生貝が確認されたのは笠岡市神島御手洗池のただ 1 ヶ所しかない。

岡山県でもともと少なかったわけでは決してなく、例えば畠田 (1935) は小田郡北木島村〔現・笠岡市〕飛島の地元住民が本種を「タバコニシ」と呼んで認知していたと記録している。一般に腹足類の種を煙草という語で形容するのは味が苦いことに由来するから、当時の飛島では食用に供されていたと推測される。また畠田和一コレクションには「備中〔倉敷市〕連島」（3 個体，#260，展示標本；「〔昭和〕9 [=1934].6.11.」，1 個体，#1728）産個体が現存し、連島周辺の高梁川河口に多産地があったものと考えられる。

しかしその後は死殻が散見されるのみとなり、生貝の確実な産出記録は上記の笠岡市神島でなされるまで途絶えていた。現時点で吉井川・旭川・高梁川の各河口に本種の個体群は見られず、完全に壊滅したと考えられる。笠岡湾奥部ではさほど摩滅の激しくない死殻が干潟に少なからず転がっており、かつて広範囲に存在した個体群が比較的最近になって全滅したことを示している。1960 年代以降の過剰な干拓・埋め立てによる干潟の消失と、排水による水質と底質の汚染が急速に本種を減少させ、いまや棲息に適した場所自体がほとんど残されていないため、外部からの新規加入も阻害されて定着に至らない状態が続いている。



モロハタマキビ

Lacuna carinifera A. Adams, 1853

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：高腹足亜区：タマキビ上科：タマキビ科)

展示標本： #4296 備中〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美

内湾の潮間帯下部～潮下帯の平坦な砂泥底に生じた藻場において、アマモ・コアマモなど海草の葉上で暮らす。交尾と産卵は1～4月にかけてなされ、新規加入は2月に生じる。産卵基質はアマモの葉に限定される(ただし葉上の特定部位への産卵は認められない)。一方、稚貝～幼貝期間の付着基質には明確な植物の選択性が見られない。小卵多産型で、産卵後約2週間でヴェリジャー幼生が孵(ふ)化し、その後少なくとも1週間は着底しないため比較的広範囲に分散が可能と考えられる。

にもかかわらず本種は不連続的かつ局所的にしか産出せず、決して普通種ではない。近年は浅海域の埋め立てなどで本種の棲息可能な藻場が急速に縮小しつつある上に、早瀬他(2016)に記した通り本種は成長段階で基質とする植物を変えるため豊かな海藻藻場も必要であり、単にアマモ類が生えているだけでは個体群は存続できない。岡山県では波部(1958)がセトウチヘソカドタマキビ(現在は本種の異名とされる)を新種記載した際、「岡山県笠岡で採集したが、稀ではない」と述べている。また畠田和一コレクションには「備前朝日村〔現・岡山市東区正儀〕切石」(「*Lacuna* 幼 黒田〔徳米〕氏同定品〔昭和〕14〔=1939〕.1.21.」, 1個体, #2792)と「備中〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美」(「*Lacuna smithii* Pilsbry ヘソカドタマキビ 黒田氏同定品」, 1個体, #4296; 展示標本)の標本が含まれ、特に沙美産は蓋と軟体が殻の中に残存しているため、採集時は生貝であったと推測される。

その後2004年5月、瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜において、砂干潟に繁茂したコアマモの上で多数の生貝が確認されたが、全て殻径2mm未満の幼貝であった。これを最後に本種は岡山県で一度も再発見されずにいる。例えば倉敷市児島唐琴町の高洲は比較的広いアマモ場が存在するため本種が出現する可能性は十分にあるが、何度調査を重ねても見出されない。恐らく岡山県には今も浮游幼生が他の海域からやって来ているものの、着底した幼貝が成熟して繁殖するに至らない何らかの理由が存在するとみられる。それが水質や底質の劣悪さなのか他の要因なのか不明であるが、いずれにせよその場で生活史を全うし、健全と呼ぶ個体群は確認できていない。



ミズゴマツボ

Stenothyra japonica Kuroda, 1962

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：リソツボ型クレード：クビキレガイ上科：ミズゴマツボ科)

展示標本： #3505 上道郡津田村〔現・岡山市東区君津〕

海岸近くの平野部の水路や水田等において軟泥底表層に棲み、止水または緩い流水中の底泥や植物・藻類、転石などの上を匍匐する。塩分の低い汽水から淡水にまたがって見られ、特に河口から分岐した水路や溝渠（こうきょ）などが主要な棲息環境である。1960 年代以前は都市部へ人工的に造成された運河等にも多産したが、それらが埋め立てられたり、排水で汚染されるなどして激減し、1990 年代には全国でも数ヶ所しか健在産地が知られていなかった。それ以降都道府県レッドリストの「定番種」となり、現時点で実に 21 都府県が絶滅から情報不足に至るまで様々なカテゴリでレッドリストに登載している。確かに本種は普通種では決してなく、稀少貝類が豊饒（ほうじょう）に産する自然度の高い場所に見られることが多いが、一方で底泥が真っ黒に還元化して悪臭を放つ排水溝に多数の生貝が平然と這（は）っている場合もある。

九州や東北地方には比較的産地が多く、長崎県では諫早湾の 1997 年の閉め切り淡水化に乗じて *Pomacea canaliculata* (Lamarck, 1822) スクミリングガイなどとともに調整池に定着した。宮城県では 2011 年の東日本大震災直後、津波で浸水した場所に進出して分布範囲を一時的に広げた。このように貧栄養・富栄養どちらの環境でも棲息可能で、他の貝類は外来種しか見られない攪乱された場所にも多産する場合がある。その割には局所的かつ不連続的にしか出現しない奇怪で比類ない種であり、本種の求める環境条件はいまだ厳密に特定できない。

岡山県では稲臣 (1953) が「児島湾沿岸」の「津田村・興除村・藤田村の一部」（現在の岡山市東区君津・南区中畦・同区藤田）に「非常に限定した分布状態」で産すると述べ、その証拠標本は岡山大学医学部に現存する。Kuroda (1962) が本種の原記載において挙げた「岡山県津田」も上記君津のことである。畠田和一コレクションにも「上道郡津田村」（「1950」, 37 個体, #3505 ; 「1950.7.22.」, 2 個体, #3472 (part; カワグチツボ 100 個体に混在)), 及び「備前朝日村〔現・岡山市東区正義〕切石」（1 個体, #3817）産の標本（それら全て「黒田〔徳米〕氏同定品」とラベルにある）が含まれている。さらに矢野 (1979) は児島湖の閉切堤防北端附近（岡山市南区築港緑町二丁目）から生貝 1 個体を記録したが、その後は県内から記録が途絶えた。本種はなぜかマメタニシとの相性が悪く、後種が多産する場所に本種が見られることは滅多にない。

稲臣が挙げた君津、中畦、藤田には現在マメタニシが見られ、本種は再発見されないままである。しかし 2012 年、岡山市中区東中島の旭川左岸（新京橋から約 100 m 南、汽水域上部）で久方ぶりに本種の個体群が見出された。これは現時点で県内唯一の産地であるが、環境変化の激しい市街地の中にあり今後の存続が危ぶまれる。本種の個体群存続にはどんな条件が必要なのか不明瞭なことも、保全対策を難しくしている。



ハツカネズミ

Macromphalus tornatilis (Gould, 1859)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：リソツボ型クレード：シロネズミ上科：シロネズミ科)

展示標本： #5633 備中〔笠岡市〕白石島

高橋・岡本 (1969) は『福岡県産貝類目録』において、本種を「〔北九州市若松区〕岩屋で唯1個採集」したのみと記した。この表現は、当時まで本種が全国的に極端に稀産で、存在自体ほとんど知られていなかったことを端的に印象付けている。対照的に瀬戸内海においてのみ頻繁に採集され、古くは瀧巖 (1938) が広島県の「竹原・有龍島」産として挙げた「*Phasianema* sp. トリデニナ」は本種のことと考えられる。岡山県においても窪田 (1962) が「〔倉敷市下津井〕六口島」産個体に言及した（畠田和一が古川田溝に提供した標本と推察される）。また畠田自身のコレクションにも「備中〔笠岡市〕白石島」（2個体、カネコスズカゴ1個体と混在、#5633；展示標本）が含まれ、「トリデニナ *Phasianema* cf. *japonica* A. Adams (cf. [*s*] *toliczkana* Nevill) (黒田氏同定品)」とラベルに記されており、当時はやはり本種がトリデニナと呼ばれていたことを示す証拠となる。

畠田の歿後（ぼつご）、1970年代の高度経済成長期に入ると、安価なコンクリート材料への需要が飛躍的に高まったことから瀬戸内海の浅海底で砂が大規模に浚渫され、その結果工事現場や学校の砂場などで本種の殻を少なからず目にする機会が生じた。しかしその一方で生貝は依然として滅多に見出されず、棲息状況が詳らかにされたのは今世紀に入ってからのことである。

濱村 (2004) は広島県呉市仁方町及び下蒲刈島で遂に複数の生貝を見出し、その時の観察結果と生体写真は福田 (2012) が提供を受けて『干潟の絶滅危惧動物図鑑』に公表した。生貝は内湾湾口部の海岸礫地砂泥底の潮間帯下部において、底泥中に半ば埋もれた転石下の還元的環境（アシヤガイが多く見られる）に特異的で、その石の下に潜んでいるユムシ類が自らの粘液で泥を固めて作った棲管の壁に沿って、転石下面に点々と付着しているという。つまり本種は極端に限定的なハビタットで生きており、長らく生貝が容易に見出されなかったのも当然のことである。いうまでもなくホストであるユムシ類が健在でなければ本種の個体群も存続できないと考えられるが、海岸環境の変質と悪化に伴って多くのユムシ類が危機的状況に陥っている昨今、本種も絶滅へ向けて急激に傾斜しているとみられる。上記の1970年代になされた砂の過剰浚渫も深甚な悪影響を本種に与えたにちがいない。

岡山県では近年も本種の死殻は時折目にするものの、他の貝類やベントスの多様性の激しい低下ぶりから類推すると、もはや本県内でユムシ類とともに本種が生き延びている場所を見いだすのは極めて困難と言わざるをえない。



ウネムシロ

Reticunassa hiradoensis (Pilsbry, 1904)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：新腹足目：エゾバイ上科：オリエレヨフバイ科)

展示標本： #5926 [玉野市築港] 宇野日之出海水浴場

内湾の潮間帯岩礁間に生じた礫混じりの粗砂底または砂底に棲息し、砂礫がつねに海水で濡れている場所を好む。往時の瀬戸内海では、花崗岩が破碎された砂からなる貧栄養の浜辺（いわゆる白砂青松の典型と言える場所）において、多くの場合カヤノミカニモリとともに多産したが、1970年代中葉以降両種とも急減し、前世紀末にはごく稀に古い死殻や破片が見られるだけとなった。カヤノミカニモリの減少要因は不明であるが、本種は肉食性の賊腹足類であるため、まだ実証はなされていないもののバイの項で言及したインポセックスが打撃を与えた可能性がある。近年は一時期に比べれば多少の回復（かいふく）傾向にあるものの、万石浦、浜名湖、三河湾、広島県厳島（大鳥居の周囲に多産する）、タイプ産地の平戸島を含む長崎県～熊本県一帯など、健在な個体群が見られる場所は全国でもごく限られている。

瀬戸内海中央部では1970年代の香川県の荘内半島周辺～坂出沖において「多い」と報告されたが（畠山・矢野, 1978）、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及がない。岡山県では岡大玉野臨海 (1978) の目録に含められているのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクションには以下の6ロットが現存する：[岡山市東区] 犬島（幼貝4個体, #922）、備前[岡山市南区] 小串村米崎（「黒田[徳米]氏同定品」, 1個体, #921；「1956.7.7.採集」, 1個体, #7409；1個体, #5449）、[玉野市築港] 宇野日之出海水浴場 海岸採集（「1957.4.29.」, 115個体, #5926；展示標本）、具体的な産地表記なし

（1個体, #4414）。この大半がほとんど摩滅・褪色の見られない新鮮な殻で、特に玉野市日之出海水浴場の標本は100個体を超え、蓋も伴っていることから大半が採集時に生貝であったことは確実であり、極めて高密度で棲息していたと考えられる。

しかしその後は香川県での状況と同様に死殻すらも全く見出されなくなり、畠田和一の時代に波打ち際で容易に観察できた個体群の大半が減り去ったことは確実である。ただし、最近刊行された北川 (2017) の図録には「岡山 磯」と称する本種の標本写真が掲載されている。そこには採集日時が記されていないので最近得られた個体かどうかは不明であるが、他の海域でも近年になって少しずつ産出が認められ、特に近隣の広島県に比較的大きな個体群が維持されていることを考えると、岡山県でも例えば笠岡・倉敷・備前各市などの島嶼（とうしょ）部や半島の先端等にひっそりと生き残っている可能性は否定できず、改めて精査が必要である。



イタボガキ

Ostrea denselamellosa Lischke, 1869

(二枚貝綱：翼形亜綱：カキ目：イタボガキ上科：イタボガキ科)

展示標本： #2592 [浅口市] 寄島

内湾の潮間帯下部から潮下帯の砂底・砂泥底に横たわって棲息する。かつては各地に多産し、食用として広く知られていたにもかかわらず近年極端に減少し、今や生き残っているのは七尾湾・瀬戸内海・有明海などわずかな海域しかない。濱村 (2004) も広島県で「1970 年代前半までは各地にいたと思われる。現在は生貝の確認はできない」と記した。

岡山県では桂 (1932) が邑久郡〔現・瀬戸内市〕長濱村や浅口郡〔現・笠岡市〕大島村でダナンガキ、オチガキと呼ばれていた種を図示し、その図は明らかに本種である。また畠田 (1935) も本種に対する岡山方言としてダイナンガキ (和気郡日生町〔現・備前市〕大多府島、児島郡〔現・岡山市南区〕小串村と〔現・倉敷市〕下津井町)、ナガレカキ (邑久郡〔現・瀬戸内市〕牛窓町前島)、バーノシリ (小田郡〔現・笠岡市〕北木島村飛島)、カキ (邑久郡朝日村〔現・岡山市東区〕寶傳)、オホガキ (下津井町) を挙げ、広い範囲で様々な呼称が与えられるほど生活に馴染み深かったことが窺 (うかが) える。畠田コレクションにも「〔浅口市〕寄島」(#2592；展示標本)、「〔笠岡市〕白石島」(#7081)、産地無記入 (#369, イソチドリの宿主) の 3 ロット (全て合弁, 1 個体ずつ) が現存する。

しかしその後は生貝を目にする機会が失われ、最近 20 年間では著しく古い半片死殻が少数得られたにすぎない。1960 年代以降の汚水流入と過度の富栄養・貧酸素化、頻発した赤潮などのために多くの個体が斃死 (へいし) し、さらに海底浚渫が棲息環境を物理的に破壊して個体群を壊滅に追い込んだと考えられる。

香川県ではわずかに生き残っているとされ、明石他 (2011) は香川県水産試験場が同県多度津町白方で得た生貝 5 個体を親として種苗生産を試みていると報じた。岡山県でもこの多度津町産や七尾湾産をもとに生産された個体を牛窓町の保護水面内に移植するなど、養殖による本種の復活を目指している。しかし岡山県在来の野生個体はいまだ見出されないままである。香川県との境の備讃瀬戸には今も棲息している可能性があるためここでは絶滅とせずにおくが、実際は限りなく絶滅に近い。



イセシラガイ

Pegophysema bialata (Pilsbry, 1895)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ツキガイ目：ツキガイ上科：ツキガイ科)

展示標本： #1587 児島郡〔現・岡山市南区郡〕甲浦村北浦

内湾の潮間帯下部から潮下帯にかけて、砂泥底に深く埋もれて棲息するため、生貝（特に大形の成熟個体）を目にする機会は少ない。それでも往時は死殻が各地で頻繁に打ち上げられたり浚渫砂泥中に見られたりして、決して稀な種ではなかった。1970 年代以降全国的に死殻すらも見られなくなり、その時期に一挙に激減したと考えられる。瀬戸内海は特に減少傾向が強く、近年生貝が見られる場所は広島県の一部（仁方町、竹原市皆実町賀茂川河口干潟）などごく限られており、香川県でも瀬尾・Tanangonan (2014) は「新鮮な合弁死殻は採集されるが、生貝は確認できなかった」と述べている。

岡山県では岡大玉野臨海 (1978) の目録に登載され、また畠田和一コレクションに「児島湾〔玉野市〕八濱町地先 干拓地^メ切内側泥揚場採集 1952.6.3.」（合弁 1 個体，#6847），「児島郡〔現・岡山市南区郡〕甲浦村北浦」（合弁 1 個体，#1587；展示標本），「〔浅口市〕寄島」（「1956.12.2.」，半片 1 個，#1698），「黒崎村〔現・倉敷市玉島黒崎〕沙美」（「昭 10 [= 1935].2.3.」，半片 1 個と破片 1 個，#6002）の 4 ロットが現存し、特に甲浦村北浦の標本は殻皮も部分的に残されている。これらの産地のうち八濱は 1959 年に閉め切られた堤防の内側に位置し、現在は完全に淡水化している。また甲浦村は閉め切りの外側ではあるが干潟は全く見られず、本種が棲息可能な環境とはもはや思われない。

畠田和一の歿後、岡山県で本種の生貝が確認されたとの信頼に足る情報はない。ただし死殻や破片は近年もごくわずかながら瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜（砂浜打ち上げ）、岡山市南区米崎沖（水深 5.2 m，ドレッジ，泥底），玉野市沼の出崎海水浴場と同市番田（ともに砂浜打ち上げ）などで得られており、特に矢寄ヶ浜の標本中には左右の殻が靱帯で繋がったまま殻頂部周辺だけ残された個体が 2 つ含まれ、これらはおそらくカラッパ類（キンセンガニ等）に捕食されたものと推測され、今なおその附近に本種が棲息していることを示唆する。しかしもし個体群が現存するとしても、ごく狭い範囲に限られることは確実で、依然として危機的状況にある。



イチョウシラトリ

Serratina diaphana (Deshayes, 1855)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：ニッコウガイ科)

展示標本： #6507 [岡山市南区] 阿津

大規模な内湾奥に形成される軟泥干潟の潮間帯に特異的で、ハイガイなどに随伴する。かつては北海道から九州まで広範囲に見られたことを文献記録や博物館標本が伝えているが、戦後の干潟消失とともに大方の地方で絶滅または激減し、近年生貝が確認されているのは英虞湾、瀬戸内海の一部、今津湾、伊万里湾、有明海、八代海、天草、宮崎県などわずかしがなく、現存個体群は相互に孤立している(山下博・木村昭, 2012: 129)。ハイガイと並んで近代日本で最も減少し、極端な危機的状況に追い込まれた干潟棲貝類の一つである。岡山県では Y. Hirase (1907) が「Bichu」(備中) 産個体を目録に挙げたのが記録の嚆矢(こうし)で、以後も平瀬興 (1910; 備中)、岩川 (1915; Bicchû)、横山 (1931; 備中)、池邊 (1936; Okayama Pref.), 平瀬信・瀧庸 (1951; Okayama-ken)、窪田 (1962; 備中 [浅口市] 安倉・[倉敷市] 連島)、Boss (1969; Otoshima, Bitchu [倉敷市玉島乙島]) に言及され、貝類分類学関係文献に登場した回数は岡山県産貝類全種の中でもハイガイと双璧の多さを誇る。また桂 (1932) が当時の岡山県の貝類方言をまとめた際、「浅口郡 [現・笠岡市] 大島村」で「オー」の名で呼ばれていた種として挙げた絵は紛れもなく本種である。つまり戦前まで岡山県産の本種は、地元の人々から全国の貝類研究者・愛好家に至るまで遍くその存在を知られていたわけで、まさに本県の貝類相を代表する種であったと言える。

畠田和一コレクション中にも「[岡山市東区] 犬島」(1 個体, #4490), 「[同市南区] 阿津」(「S27 [= 1952]」, 4 個体, #6507; 展示標本), 「[同区] 甲浦村」(1 個体, #6981), 「浅口郡 安倉」(「昭和九 [= 1934] 年三月廿日」, 8 個体, #7332) 産の 4 ロット計 14 個体が現存し、全てが合弁で、大半が採集時に生貝であったとみられる。しかし 1959 年の児島湾閉め切りによって最大の個体群が一举に消滅し、高梁川河口域や笠岡湾でも干拓・埋め立ての拡大に比例した干潟消失と水質汚染が本種に致命的な打撃を与えた。その結果近年は古い死殻がごく稀に見られるのみとなったことから、本県レッドデータブック前版 (2010) では絶滅とされていた。

ところが 2018 年 3 月、備前市鹿久居島での調査で、同島現寺の小規模な干潟の一角において本種の生貝が複数見出され、県内から完全に滅び去ったわけではなかったと判明した。これは児島湾閉め切り以降初の本種の生存確認であり、瀬戸内海中央部に唯一残った個体群の発見でもある。同地は岸辺に護岸もほとんどなく、現在の岡山県では例外的に干潟本来の景観が保たれ、その場で本種は幼貝から老成個体まで様々な成長段階の生貝が見られるため個体群が維持されているのは確実である。戦後の本県で生じた貝類の大量絶滅を考えると、今ごろになって本種の棲息地が発見されたのは奇蹟と呼ぶにふさわしい。この貴重極まりない場所と個体群が損なわれないよう、最大限の配慮と注視が必要である。



オチバ

Gari chinensis (Deshayes, 1855)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：シオサザナミ科)

展示標本： #1427 [笠岡市] 北木島

内湾奥の河口部汽水域流水中が主要なハビタットであるが、瀬尾・Tanangonan (2014) は香川県での調査において「砂浜である[観音寺市]有明浜の中潮帯に多産するのを確認した。おそらく低塩分の砂浜地下水が豊富に湧出するため、この個体群が維持されていると思われる」と述べ、河口のみならず前浜干潟にも産することがある。粗砂底または砂泥底に最大で 30 cm 程度潜り、水管を長く伸ばして埋在する。河口の個体群は河川改修や水質汚濁などによって全国的に危機に晒（さら）されており、既に東京湾・相模湾・大阪湾・博多湾で絶滅したとされる。瀬戸内海では上記香川県のほか広島・山口両県で近年も健在個体群が確認されている。

岡山県では岡大玉野臨海 (1978) の目録中に登載され、また畠田和一コレクションにも「[笠岡市] 白石島」(#4268 ; 「1954.8.20.」, #5833) と「[笠岡市] 北木島」(#1427, 展示標本 ; #4269) の計 4 ロット 4 個体（全て合弁）が現存する。しかしその後は県内の海岸全域を通じて一切再発見されず、本県では絶滅した可能性も考えられていた。ところが岡山県版レッドデータブック 2020 執筆中の 2019 年 7 月 9 日付で、インターネット上の某通信販売サイトに、「岡山県」産と称する本種の標本（「3.3 cm」と「3.5 cm」の少なくとも 2 個体）が鮮明な画像付きで掲載されて売りに出された。採集日や産地の詳細などは公表されていないため、現在の岡山県内に本種が棲息している証拠に直ちに結びつくものではないが、今なお県内のどこかに個体群が存在するなら、それは 1960 年代以降の環境攪乱によって大半の産地が失われた上でわずかに残されたものであるから、今後改めて精査の上で保全対策を検討する必要がある。



ムラサキガイ

Hiatula adamsii (Reeve, 1857)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：シオサザナミ科)

展示標本： #1992 岡山市松ヶ鼻（児島湾）

湾口部や島嶼間など潮の入れ替わりが盛んな内湾域の潮間帯下部～潮下帯に産し、細砂底または砂泥底に深さ 30～40 cm ほど潜って棲息する。入水管と出水管の間が 10～15 cm も離れ、表層に直径の異なる穴（約 8 mm と 5 mm）を別々に開ける（フジナミも同様）。かつてはさほど珍しい種ではなく、山口県など一部の地域では伝統的に食用に供されているほどであるが、戦後の干潟の消失や環境悪化によって全国的に激減し、1990 年代後半には健在産地がほぼ見失われて絶滅寸前と見なされるに至った。その後山口・大分・宮崎各県で個体群が見出され、浜名湖・三河湾・伊勢湾などでも少数の生貝が確認されて、ここ数年は徐々に回復傾向にあるとみられる。香川県では「死殻は比較的普通に見られるが生貝は稀」と報告されている。

岡山県では畠田 (1935) が、当時の児島郡甲浦村（現・岡山市南区）飽浦（児島湾の湾口に位置する）で本種が「ウミノカラスガヒ」という方言で呼ばれていたことを記録している。また畠田和一コレクションには「岡山市松ヶ鼻（児島湾）」（合弁 1 個体、#1992；展示標本）からの標本が現存し、松ヶ鼻は飽浦と同じ地域を指す地名である。これらの記録や標本から、戦前の児島湾湾口部では地元の人々が独自の方言で呼ぶほど普通に見られた種であったと推測される。しかしその後は他県と同様に記録が途絶え、20 世紀末まで消息不明であった。児島湾湾口部は 1959 年の閉め切りの影響によって環境が一変し、現在は本種が棲息可能な状態からかけ離れており、完全に絶滅したことは明らかである。

ところが 2009 年ごろ倉敷市児島唐琴町高洲で生貝が採集され、いまだ本県で絶滅していなかったことが判明した（残念ながら写真のみで標本は現存しない）。また、2018 年 7 月の高洲における調査では生貝こそ確認できなかったものの、死亡後まもないとみられる幼貝の合弁死殻が得られ、今も確かに同地に個体群が維持されているとみられる。しかし依然として著しく稀産であるため、個体群の規模が小さいことは明らかである上に、本県では高洲以外の場所からは死殻すら全く確認されていない。このため現時点では安泰と呼ぶにはほど遠く、現存する個体群がこれ以上縮小しないよう注視する必要がある。



イソシジミ

Nuttallia japonica (Reeve, 1857)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：シオサザナミ科)

展示標本： #2589 [笠岡市] 北木島

河口汽水域下流部の流水中砂泥底に 10～30 cm ほど潜って棲息する。内湾奥に多いが、日本海など外洋に注ぐ河川であっても産出することがある。本州中部以南ではオチバやハザクラと同所的に産することが多いが、それら 2 種は全国的に減少傾向が顕著なため環境省や多くの都道府県のレッドリストに登載されている。これに対し本種は保全対象とされる機会が格段に少なく、千葉・愛媛両県が絶滅危惧 II 類相当、大阪府が情報不足としている程度である。

しかし注目されずにいる間に、瀬戸内海では本種も着実に絶滅へ傾斜しつつある。これを近年最も端的に表現したのが濱村 (2004) で、彼は広島県呉市における棲息状況を「1960 年頃は河口にいた」と過去形で記すとともに、芸南地方に絞った図鑑であるにもかかわらず飛び離れた「大竹市」を生貝の産地として挙げているのが苦渋の選択めいていて頗る印象的である。また香川県では畠山 (1977) が燧灘東部・備讃瀬戸西部から本種を記録しているものの、2009～13 年に同県で調査を実施した瀬尾・Tanangonan (2014) には言及がない。

岡山県では減少ぶりがさらに明瞭である。戦前の本県では畠田 (1935) が当時の小田郡神島外村(現・笠岡市神島)外浦で、本種が同地の人々から「ホトケガヒ」なる方言(この名は旧名のミロクガイと起源を同じくするのかもしれない)で呼ばれていたと記録している。また畠田自身のコレクションにも「備中〔笠岡市〕北木島」(合弁 1 個体, #1987; 合弁 2 個体, #2589; 展示標本), 「備中豊島〔詳細不明, 香川県土庄町豊島か〕」(合弁 2 個体, #2597), 及び産地無記入だが岡山県産の可能性が高い合弁 1 個体 (#4427) が含まれている。さらに三重県総合博物館所蔵の金丸但馬コレクション中にも「備中〔笠岡市〕白石島」産 2 個体が現存することが公表されており(中野環, 2015), その標本はアシガイの項で述べたのと同様に畠田が金丸に贈った可能性が高い。

しかしその後は岡大玉野臨海 (1978) の目録に登載された以外は一切の記録がなく、最近 20 年間では破片すらも見出されることがない。このため本種は岡山県(及び対岸の香川県)では既に絶滅したか、またはそれに近い状態まで激減したことは明らかである。本種の主要な棲息環境である河口部汽水域は、本県では吉井川・旭川・高梁川とも護岸などで甚しく攪乱され、タケノコカワニナ、キヌカツギハマシイノミ、ハナグモリなど複数種が完全に滅び去った。本種も 1960 年代以降にそれらの河口から棲息地を奪われて消滅したと考えられる。ただし、他の都道府県では本種より危機的状況にあるオチバはまだ本県に棲息している可能性が残されているため、同種との整合性を考慮して絶滅と断じることは避ける。また畠田標本の産地である北木島には未調査の小規模な干潟が残されており、今後精査する必要がある。



フルイガイ

Semele cordiformis (Holten, 1802)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：アサジガイ科)

展示標本： #1983 備前〔倉敷市下津井〕六口島

内湾湾口で外洋水が流入する場所や潮流の速い島嶼間の海岸において、砂泥底に大小の岩礫が混在する干潟から潮下帯にかけて産する。棲息が可能となるための条件が厳密なため環境変化に敏感で、近年は全国的に減少傾向が強く、健在な個体群が認められるのは佐賀県唐津湾・伊万里湾などわずかで、山口～大分両県の瀬戸内海周防灘や三重県英虞湾では死殻が稀に見られる程度まで激減している。香川県では畠山・矢野 (1978) は庄内半島～坂出沖で死殻を得たと記録しているが、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及がない。

岡山県では池辺・吉田 (2006) が「1975.6.8.」採集の本県産個体を挙げたのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクションには「備前〔倉敷市下津井〕六口島」(合弁4個体、うち1個体は「黒田〔徳米〕氏同定」, #1982, 1983 ; 展示標本) 産の見事な標本が含まれ、これらは色彩や靱帯などの保存状態の良好さから、すべて採集時は生貝もしくは死亡後まもない死殻であったと見なされる。したがって畠田和一が主に活躍した 1950 年代以前には、水島諸島などに本種の棲息に適した環境が存在したと推測される。

しかし近年は、2010・2011 年に玉野市沼の出崎海水浴場で古い半片が計2個得られたのみで、生貝はおろか合弁死殻すら全く見出されていない。このため本県のみならず対岸の香川県も含めて本種はもはや絶滅したか、それに近い状態まで激減してしまった可能性が高い。離島の海岸にはまだわずかに生き残っている可能性があるため今回は絶滅と断定するのは避けるが、今後県内で生貝を見いだすのは相当に困難な課題である。



ヤチヨノハナガイ

Raeta pellicula (Reeve, 1854)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：バカガイ上科：バカガイ科)

展示標本： #1902 [浅口市] 寄島

大規模な内湾の砂質干潟低潮帯から潮下帯（水深約 30 m まで）に棲み、死殻は時折浜辺へ打ち上げられるが、生貝を目にする機会はごく少ない稀産種である。最近 20 年間で全国唯一の生貝確認例は 2001 年の山口県山口市秋穂二島で、アマモ場に接した清浄な細砂底から潮干狩りで 2 個体が掘り出された。瀬戸内海では稲葉 (1982) が全域に少産とし、もともと低密度で出現していたとみられるが、1990 年代にはほとんど確認されなくなっていた。ただし近年も死殻はそこそこ報告されており、濱村 (2004) は広島県の仁方・蒲刈両町から記録し、香川県でも瀬尾・Tanangonan (2014) が「生貝は採集されなかった」と断りながらも「[綾歌郡宇多津町] 浜干潟では新鮮な死殻を定期的に確認している」と今後の生貝発見に期待を滲ませている。

岡山県では畠田和一コレクションに「児島湾（[岡山市南区] 小串村漁網ニテ）」（「昭和 14 [= 1939].1.13. 採集」, 3 個, #1903）及び「[浅口市] 寄島」（「波部 [忠重] 氏同定」, 1 個, #1902 ; 展示標本）の 2 ロットが含まれるが、いずれも状態のよくない半片死殻で、1950 年代以前においても生貝や完全品の採集は困難であったらしい。半片死殻または破片は近年も瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜 (2004 年), 同市黄島西沖（ドレッジ, 水深 13 m, 貝殻混じり砂礫底）(2014 年), 玉野市沼の出崎海水浴場 (2011 年), 同市波張崎～岡山市東区犬島間（ドレッジ, 水深 14.3 m, 砂底）(2002 年) から採集され、特に黄島西沖の死殻は新鮮であったため、今なお県内に個体群が維持されている可能性を考えていたところ、2018 年 3 月、笠岡市五番町の漁港へ廃棄されたばかりの生々しい漁屑中から若い生貝 1 個体が遂に見出され、いまだ県内に棲息していることが確実となった。岡山県では、内湾潮下帯の砂底や砂泥底に棲む貝類の種の多くが 1960 年代以降に絶滅または極端に減少したのに対し、他の地方で稀少化した本種が今も滅びず生残しているのは特筆に値する。ただし生貝の確認例はまだその 1 個体のみであり、死殻も頻繁に見られるとは言えない。したがって個体群が現存するとしても局所的に少数個体で構成されているのは明らかで、絶滅の危機にある可能性が否定できないため、今後も引き続き精査し、より正確に現状を把握する必要がある。



クチベニ

Corbula erythrodon Lamarck, 1818

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：オオノガイ目：オオノガイ上科：シコロクチベニ科)

展示標本： #2182 [瀬戸内市] 牛窓町莚江浜

内湾湾口の潮間帯下部～潮下帯の清浄な細砂底に棲み、特に河川が流入する入り江の砂浜を好むが、かといって汽水域に見られるわけではない。特に日本海南西部では普通に見られ、多産する場所では死殻のみならず生貝も浜辺に打ち上げられることがある。一方で大規模な内湾奥の軟泥底は棲息に適さず、瀬戸内海中央部ではもともと棲息可能な場所自体が少ないため普通種と呼びがたく、近年の香川県では少数の死殻しか確認されていない（瀬尾・Tanangonan, 2014）。

岡山県では岡大玉野臨海（1978）及び同牛窓臨海（刊行年不詳）の目録に登載されており、畠田和一コレクションには「[岡山市東区] 犬島」（合弁 1 個体と半片 1 個、#2179）、「[瀬戸内市] 牛窓町莚江浜」（「S [昭和] 8 [= 1933].6.28.」，合弁 1 個体，#2182；展示標本），産地表記はないものの岡山県産と推定される合弁 2 個体（子息の自由研究課題とみられる標本箱中，#4454）の計 3 ロット 5 個体が現存する。これらのうち合弁個体はいずれも光沢・色彩・靱帯がよく保存され、採集時は生貝であったと思われる。瀬戸内市牛窓～岡山市東部の周辺は本県沿岸の中でも島嶼が多く潮流も速いため、かつては内海にありながら外洋性種が多く見られた場所であり、本種の記録や標本の産地が牛窓附近に集中しているのは自然で理解しやすい。

しかし最近 20 年間では本種の生貝や合弁死殻は一切見出されていない。半片は牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜、岡山市東区正儀の飯盛岩周辺、同市南区小串相引、玉野市沼の出崎海水浴場などで得られているが、いずれも内面の光沢や色彩が失われた古いものであり、最近まで生きていた個体とは思われない。このため現在も県内に個体群が維持されているか否かは確言できず、少なくとも 1950 年代以前と比較して著しく減少したことは疑いがない。高度経済成長期以降になされた護岸や埋め立てによる海岸線の単調化や、水質・底質の汚染など複合的な要因により、県内から外洋性種がことごとく絶滅したのとともに本種も急減したことは確実である。

